

# 視点についての認知言語学的考察

森山 新

morishin@cc.ocha.ac.jp

お茶の水女子大学

## < 目 次 >

1. はじめに
2. 先行研究
3. 具体的表現と把握のしかた
4. おわりに

## 1. はじめに

例えば、私という人間が、遠くに富士山を見ているとしよう。これを言語で表すとどうなるであろうか。英語なら「I see Mt. Fuji over there.」ということになるであろう。しかし日本語の場合、「私はあそこに富士山を見る。」とはならず、「あそこに富士山が見える。」というのが普通である。このように両言語の表現には把握 (perspective) のしかたに違いが生じることがある。英語の表現では、富士山だけではなく、私自身を客観的に描写の対象に含め、「私」という存在が、「富士山」という山を見ているといった表現で描き出している。言いかえれば、私とは別のところにもう一人の私 (客観的な認知主体<sup>1)</sup>) を置いて、その認知主体としてのもう一人の私が、「私が富士山を見ている」という事態を表現している (これを「客観的把握」と呼ぶことにする)。これに対し、日本語では私自身が認知主体となり、私の目に映ったままの情景を描写しているために私自身は表現の対象から外れている (これを「主観的把握」と呼ぶ)。これらを図1に表す。

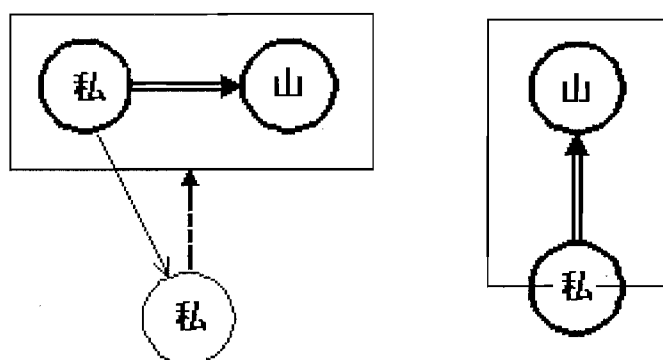
左が英語の視点の置き方、右が日本語の視点の置き方である。図で四角い枠は、「私が富士山を見る」という事態を見ている認知主体のスコープ (視界) を示している。英語

---

<sup>1</sup> 視点研究では「視点人物」と言われる場合もある。

の場合は、「富士山を見る私」とは別に、第二の私として「認知主体の私」を設定した把握となっている。これに対し日本語の場合には、私は「私が富士山を見る」という事態の参加者でありながら、認知主体でもあるため、認知主体の描写の対象、表現の対象からは半ば外れている（「私」が認知主体の視界を表す四角の境界線上に書かれているのはそれを示している）。「半ば」としたのは、普通は視界から外れるが、「私には、あそこに富士山が見える。」というように視界に入れ、表現に含めることもできるからである。

図1 客観的把握と主観的把握



このような傾向は、主語が1人称だけではなく、3人称の場合にもあてはまる。有名な川端康成の『雪国』の冒頭で、「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。」という川端の表現は英語の訳本では以下のようにになっている。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

ここでの参加者は3人称の人物であるが、日本語で書かれた川端の表現では、3人称のその人物が表現の対象から外れ、無主語化することで、3人称主語の表現までも、あたかも1人称主語のように語られている。言い換えれば3人称主語が話者（1人称）の代わりとなることで、結果的に3人称主語に引き付けられ、感情移入が行われ、あたかも1人称の私がそこにいるかのような表現となっている。これに対し、英語では、客観的な視点から、3人称の人物を含め、遠くトンネルを抜け出る汽車を描き出している。

このように日本語は、話者である私から見た把握、すなわち主観的把握から物事を描写

する傾向が強い。日本語の場合、1人称主語は省略することが多いのは、私が基本的に見る主体（認知主体）であるため、見る対象、言い換えれば、描写・表現の対象からは外れることが多いためである。一方の英語は客観的把握から物事を描写する傾向が強い。英語の場合には1人称も含めて、主語を省略しないのはこの反映であるといえる（池上2000）。

そもそも言語とは何であろうか。自分（話し手）が感じたことを概念化したり、思考したり、表現したりするものであると同時に、他人に伝達したりするための道具であろう。前者がモノローグ的な言語の働きであるとするれば、後者はダイアログ的な言語の働きであると言える（池上2000）。日本語のように視点を話し手自ら（1人称）に置くというのは、言語の働きのうち、前者、すなわち自分（話し手）が感じたことを概念化したり、思考したり、表現したりする道具としての言語の側面が反映したものと考えられる。これに対し、言語をコミュニケーションの道具とした場合には、1人称（話し手）とともにコミュニケーションの相手としての2人称（聞き手）というものが登場し、それらを対等な立場に立たせる必要があるが、そのためには、1人称中心の視点でも2人称中心の視点でもない、第3の立場である「客観的把握」を選択するほうがコミュニケーションが滞りなく成立しやすくなる。英語の視点の置き方は、こちらのほうを選択したのである。

こうした視点の置き方の違いは言語表現のいろいろなところに現れる。以下、「行く・来る」、授受動詞、ヴォイス（受動態）に関してそのことを述べる。

## 2. 先行研究

「行く・来る」、授受動詞、ヴォイス（受動態）と把握の主観性について触れたものとしては、大江（1975）、池上（2000）などがある。しかしこれら全体を一まとめにして一貫性を持って説明した研究は、管見の限りでは見当たらない。

## 3. 具体的表現と把握のしかた

### 3. 1. 行く・来る

動詞「行く・来る」には話し手の視点が内包されている。

行く：話し手（または話し手が視点を置いている場所）から遠ざかる移動

来る：話し手（または話し手が視点を置いている場所）に近づく移動

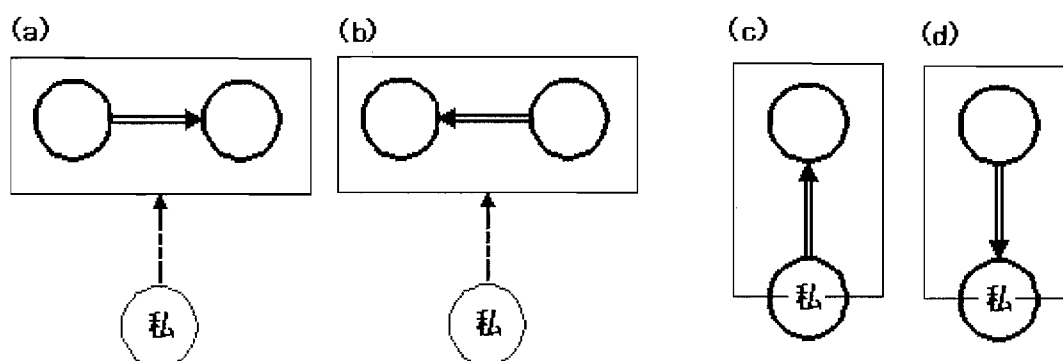
(1)は話し手の領域から遠ざかる移動であるため、「行く」が用いられている。また(2)では、話し手の視点が、相手（聞き手）の家に置かれており、そこに近づく移動であるため、「来る」が用いられる。(3)、(4)は空間的な移動ではなく、時間的な移動が問題になっている。時間的な移動では、過去から現在への変化は、話し手に近づく移動であるので、「てくる」が用いられ、現在から未来への変化は、話し手から遠ざかる移動であるので、「ていく」が用いられる。もちろん、この場合にも、視点を1年前の時点におけば、(5)のように過去から現在への変化は、話し手が視点を置いている時点＝1年前)から遠ざかるので、「ていく」を用いることができる。

明日君の家に行ってもいい？  
 明日君の家に、だれか来るの？  
 最近、だんだん物忘れが激しくなってきた。  
 これから、僕の運命はどうなっていくのだろう。  
 1年前から、ぼくはだんだん太っていった。

次に、日本語の「行く・来る」と英語の「go/come」の用法の違いがなぜ生じるのかを、上の把握の主観性の観点から述べてみたい。

図2で、(a)、(b)が英語、(c)、(d)が日本語の場合である。(a)、(b)で左が私、右が相手を指すが、客観的把握では、私も相手も客体化（3人称化）され、その結果、私と相手とは対等な参与者と見なされることから、同じ白丸で表されている。(a)、(c)は私が相手（2人称）のほうへ向かう動作で、(b)、(d)は逆に相手（2人称）が私のほうへ向かう動作である。

図2 日本語の「行く・来る」と英語の「go/come」



日本語では(c)は「行く」、(d)は「来る」と使い分けられるが、英語では(a)、(b)どちらも「come」である。この理由は、図のように、客観的把握と主観的把握を区別して書いた図で見ると一目瞭然である。英語のように客観的把握をした場合には、私も相手も対等な参加者として扱われ、そうすると認知主体としての第2の私からの見えは、(a)と(b)でほとんど同じものとして把握される。これに対し、主観的把握をした場合には、認知主体としての私からの見えは全く逆の意味合いを示している。同じものとして把握される英語では同じ動詞(come)で表しても問題ないが、反対のものとして把握される日本語では、同じ動詞では表しにくく、反対の意味を持つ「行く・来る」で区別されるわけである。

### 3. 2. 授受動詞

どこに視点を置いて事態をとらえるかにより、異なった言語化がなされる言語表現がいくつかある。日本語の場合には、上述の「行く・来る」のほか、ヴォイス（受動態）と授受動詞などに視点が関わってくる。また日本語の場合、視点の統一は談話における結束性を高めるなどの重要性も持っている。

「太郎が次郎をなぐった。」のほうが、「次郎は太郎になぐられた。」よりも普通に用いられるのはなぜか。「私は彼にプレゼントをもらった。」とは言えても、「彼は私にプレゼントをもらった。」とはあまり言わないのはなぜか。また、この場合には「私は彼にプレゼントをあげた。」というのが普通なのはなぜか。ここには、視点に関してのルールがあるからである。以下、日本語の場合の視点の置き方のルールをまとめてみる。なお、視点が向けられる対象は主語になるのが普通である。

#### <視点のルール>

##### ①参加者に話し手が含まれる場合には、話し手に視点が置かれやすい

話し手ではないが、話し手にとってウチの人物や、話し手が心を寄せる参加者がいれば、そこに視点が置かれやすいのも同様である。「私は彼にプレゼントをもらった。」とは言えても、「彼は私にプレゼントをもらった。」とは普通言わないこと、「彼は私にプレゼントをもらった。」とは言わず、「私は彼にプレゼントをあげた。」ということはこの原則で説明できる。

##### ②被動作主より動作主のほうに視点が置かれやすい

一般に人間の認知は、動力連鎖の流れの順で視点を移動する傾向があるため、動作主と被動作主とがあれば、動力連鎖の上流にある動作主に視点が置かれやすい

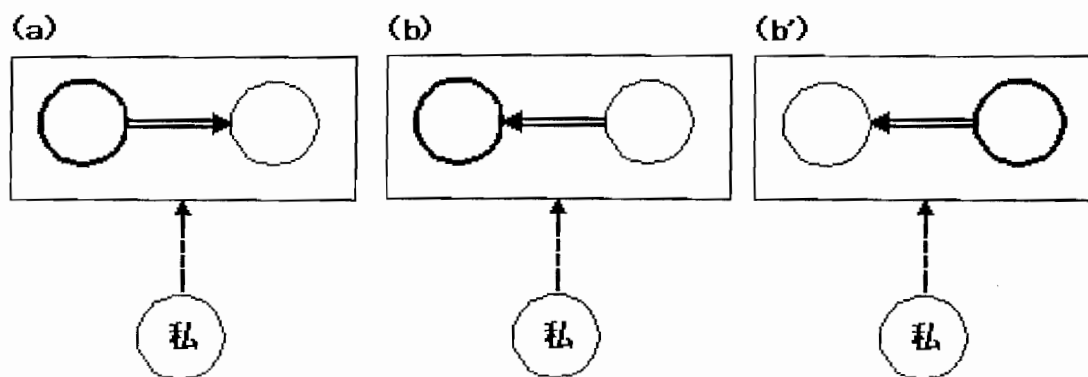
(Langacker 1991)。この点は英語も同様である。能動態の「太郎が次郎をなぐった。」のほうが、受動態の「次郎は太郎になぐられた。」よりも用いられやすいのはそのためである。

③やりもらいの事態において、客観的把握をとるか、主観的把握をとるかは、言語により異なる

英語は客観的把握でとらえる。図3は英語の場合で、授受動詞を表す二重矢印(⇒)の左側の○が話し手(1人称)である。

(a)の場合には、①のルールでも話し手に視点が向けられ、②のルールでも動作主(あげ手)に視点が向けられるので、「話し手=あげ手」が主語になり「give」で表現される(視点(注目)が向けられている○が太線になっている)。(b)の場合には、①と②のルールに矛盾が生じるため、どちらかのルールが優先されることになる。①のルールが優先されると、話し手に視点が向けられ、「話し手」が主語になり「receive」で表現されるが、②のルールが優先されると、(b')のように、動作主(あげ手)に視点が向けられるので「あげ手」が主語になり「give」で表現される。

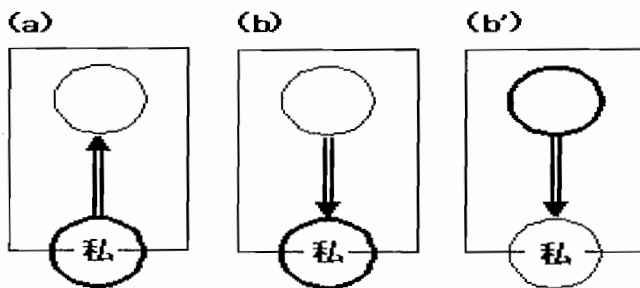
図3 英語の授受動詞の把握のしかた



これに対し日本語では、図4のように主観的把握を用いる。(a)の場合には、①のルールからも話し手に視点が向けられ、②のルールからも動作主(あげ手)に視点が向けられるので、「話し手=あげ手」が主語になり「give」で表現される。(b)の場合には、①と②のルールに矛盾が生じるため、どちらかのルールが優先される。①のルールが優先されると、話し手に視点が向けられ、「話し手=もらい手」が主語になり「receive」で表現されるが、②のルールが優先されると、(b')のように、動作主(あげ手)に視点が向けられ

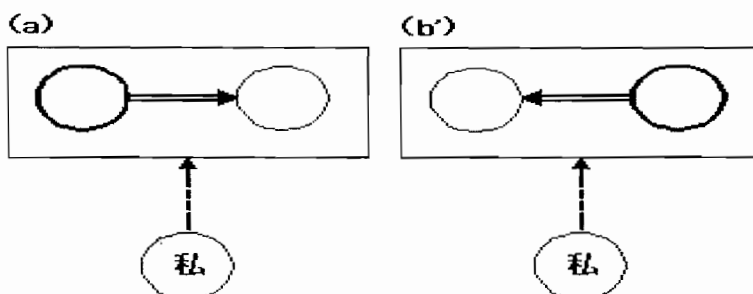
るので「あげ手＝相手」が主語になり、「give」で表現される。客観的把握をとる英語では、私と他者とは同じように客体化される結果、私と他者との区別はなくなり、その結果、図3の(a)と(b')とで、「認知主体としての私」からの見えはほぼ等しくなるので、同じ「give」という動詞を共有してもよさそうである。ところが日本語の場合には、図4で(a)と(b')とを比べると、「認知主体としての私」からの見えはあまりに異なっており((a)ではモノが私から遠ざかり、(b')ではモノが私に近づいてくる)、同じ動詞で表すには問題がありそうであろう。かといって(b')は「あげ手」を主語としているため、「もらう」で表現することもできない。そのため日本語では「あげる」でも「もらう」でもない、第3の動詞「くれる」が必要になったわけである。

図4 日本語の授受動詞の把握のしかた



ついでに述べると韓国語の場合は英語と同様であると考えられる。中国語の場合は、把握の主観性は客観的把握で、①のルールが適用されず、②のルールだけが適用されるので、英語で見られた(b)の場合がなくなり、(a)、(b')だけとなり、「認知主体＝私」からの見えも同じであるため、必要な動詞は「give」に相当する動詞、「給」1つで済むことになる。

図5 中国語の授受動詞の把握のしかた



また日本語、英語、韓国語、中国語の視点のルールと授受動詞の関係を表1にまとめた。

表1 日本語、英語、韓国語、中国語の視点のルールと授受動詞の関係

|        | 日本語                 | 英語                           | 韓国語        | 中国語 |
|--------|---------------------|------------------------------|------------|-----|
| 視点の主観性 | 主観的                 | 客観的                          | 客観的        | 客観的 |
| ルール①   | ○                   | ○                            | ○          | ×   |
| ルール②   | ○                   | ○                            | ○          | ○   |
| 動詞の種類  | あげる、も<br>らう、くれ<br>る | g i v e、<br>r e c e i<br>v e | 주다, 받<br>다 | 給   |

さらに談話レベルで考えると、視点のルールはもう一つ加わる。

④視点はできるだけ固定させ、移動させない

談話レベルの原則として重要なのは、視点は不必要に移動させないということである。視点の固定は談話の結束性を高める。

英語のように客観的把握型の言語では、①のルールはあるものの、それ以外ではすべての参加者が対等に扱われる。このため、どの視点からながめるかという点に関しては、話し手、または話し手が気持ちを寄せた人物が相対的に多くなることはあっても、それに固定されるということは少ない。

これに対し、日本語のように主観的把握型の言語では、どの視点からながめるかという点においては、特別な理由がない限り、話し手、または話し手が気持ちを寄せた人物ということになり、視点が固定される。もちろん、これは原則であり、話し手の何らかの動機づけにより、視点は移動する可能性がある。例えば、犯人探しの場面において、あるAという人物に注目が集中している場合などは、話し手以上にAに視点が置かれ、そこに視点が固定される可能性が出てくるため、「Aは私に現金をもらった。」という言い方も出てくる可能性がある。

さらに授受動詞は補助動詞として行為のやりとりを表す用法がある。用法の原則は同じであるが、ただここで注意すべきことは、行為のやりとりでは恩恵の授受が問題となり、この授受の方向性は、モノや行為の方向性と異なることがある。(6)では、恩恵の授受の方向



性が、モノや行為の方向性と一致（お隣さん→私）するので問題なく「～てもらう」が用いられるが、(7)ではモノや行為の授受は「お隣さん→私」であるが、恩恵の授受は「私→お隣さん」であるため、「～てあげる」が用いられる。(8)は(7)と反対の場合で、モノや行為の授受は「私→お隣さん」であるが、恩恵の授受は「お隣さん→私」であるため、「～てもらう」が用いられる。

お隣さんに犬を譲ってもらう。

お隣さんから犬をもらってあげる。

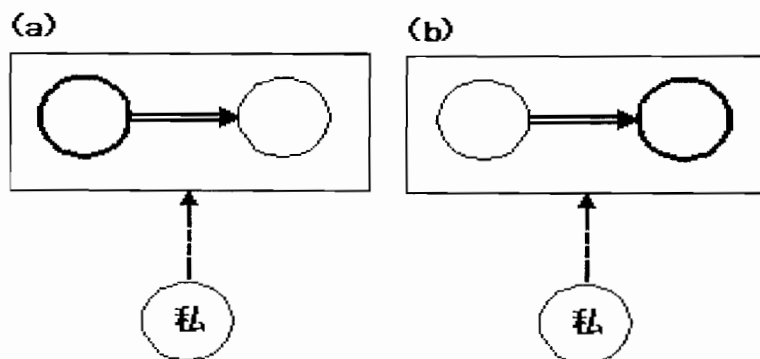
お隣さんに犬を受け取ってもらう。

### 3. 3. 受動態

最後にヴォイス（受動態）について、視点という観点から述べてみたい。また日本語になぜ間接受身があるのかについても論じる。

英語の能動態・受動態の場合には、図6のように客観的把握がなされ、(a)のように動作主に視点を向ければ能動態、(b)のように被動作主に向ければ受動態になる。客観的把握では、参加者は同等の存在としてほとんど区別なく用いられるため、非情物も主語になれる。

図6 英語の能動態・受動態

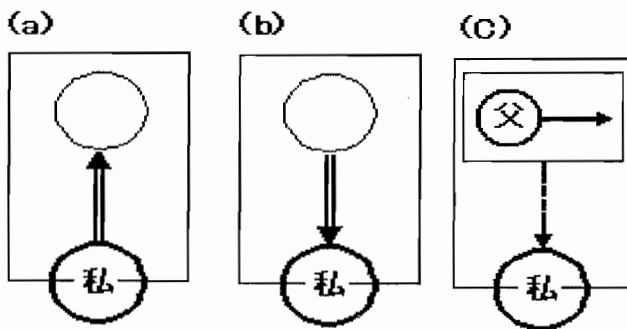


これに対し日本語の能動態・受動態では、図7のように、私を認知主体とした主観的把握が用いられる。そして日本語のヴォイスでは本来的に、能動態は私が働きかける事態を表し、受動態は私に働きかけられる事態を表す。もちろん主語は私に限らず、さまざまなものが主語に来るが、いずれの場合にも非情物が主語になりにくい。これは私の代わり（拡張）として主語になっていることによる。

また(b)は直接受身、(c)は間接受身である ((c)は「父に死なれた。」の場合)。図7の

(c)を見ればわかるように、間接受身は、私が「父が死ぬ。」という事態の被動作主ではなく、その事態から間接的に被害を受けたという立場に置かれている（図では破線の縦の矢印で描かれている）。間接受身は私とは直接関わりのない事態（動力連鎖）に関する記述であるが、それが私に何らかの影響を及ぼす場合、「（間接的にはあるが）私に働きかけられる事態」となり、その結果受動態となる。その場合、項が一つ増えることになるが、その項は、原則として影響を受けることになる私である。しかし、それに代わる人などの有情物である場合もあるが、それは日本語が主観的把握型の言語であることから説明できる。

図7 日本語の能動態・受動態



#### 4. おわりに

以上見てきて明らかなように、視点は、さまざまな言語表現に関わっている。そしてそれらの表現に見られる英語と日本語との違いは、両者が扱って経つ把握の主観性の違いが関わっているのである。

#### 【参考文献】

池上嘉彦 (2000) 『日本語論への招待』講談社.

大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究：主観性をめぐって』南雲堂.

Langacker, Ronald. W. (1991) Foundations of cognitive grammar. Vol.2. Stanford University Press.